

## 家族をテーマとしたディベートによる 思考の深化と指導力の向上

馬場 彩果

植草学園大学発達教育学部

本研究は、小学校学習指導要領家庭科「A家庭生活と家族」の内容と指導について教員養成課程で扱うにあたり、学生が家族について見つめ直し、考えを深めることを目的とした授業実践報告である。方法として、ディベートを用いた。ディベートはさまざまな角度から物事を考えられるほか、個人的意見は求めないため、本題材を扱うには適した手法と判断した。学生は、肯定側と否定側、審判を任意選択し、その後提示された家庭生活や家族に関連する2つの論題について討論し、勝敗を決めた。論題について多角的にとらえた意見を出したり、相手側の主張を聞いたりすることにより、学生の中に新たな気づきや考えが生まれ、家族とは何なのかを深く考えた考察文が提出された。その後、学生は家庭生活と家族分野の学習指導案作成と模擬授業を行った。教員として家族について子どもに伝えたいことが明確にまとめられており、ディベートの経験は効果的であったと考えられた。

**キーワード：**教員養成課程、小学校家庭科、家族、ディベート

### 1. はじめに

小学校学習指導要領において、家庭科の目標は「衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、家庭生活を大切にする心情をはぐくみ、家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる」とし、学習内容は「A家庭生活と家族」、「B日常の食事と調理の基礎」、「C快適な衣服と住まい」、「D身近な消費生活と環境」の4つとなっている。このうち「A家庭生活と家族」については、(1)「自分の成長と家族」、(2)「家庭生活と仕事」、(3)「家族や近隣の人々とのかわり」の3項目で構成されており、「家庭生活を実際の生活により近いものとして総合的にとらえることができるようになり、より効果的な学習が展開できることを意図」して、B、C、Dの内容と関連させて学習させることや、A(1)「自分の成長と家族」の事項をガイダンスとして第5学年の最初に学ぶ

ことなどが示されている<sup>1)</sup>。

「家庭生活と家族」について濱崎は、「子どもが生きる家族の現実と教師が望む教育的願いや教えるべき教育内容とのそぐわなさに、教師たちがいかに葛藤し、困難を感じているか」と、家族が主題の学びに教師が抱く困難を述べている<sup>2)</sup>。また菊地は、家族の多様化が進行する近年、「従来の家族観には当てはまらない家族で暮らす子どもが多数いることが十分予想されるなかで、ある特定の家族のあり方を理想として家族や家庭生活について学ばせることは、その理想からはずれた子どもたちを作り出し、場合によっては自らの家族を否定的に捉えることにもなりかねない」と指摘し、「固定的な家族観にとられることなく多様な家族のあり方を学ぶ」家庭科教育の意義を検討している<sup>3)</sup>。加地らも、「建前論や一般論の『家族・家庭生活』ではなく、『児童一人ひとりの家族・家庭生活』に指導者も向き合い、児童それぞれが『自分自身の生活』に関心を持ち、自分の生活の中から課題を発見し、解決策を見

いさせるような学習を展開したい」と述べる<sup>4)</sup>など、この分野のもつ独特の性質やそれに伴う教育的課題については数多く論じられている。

教員養成課程において「家庭生活・家族」の内容をどのように扱うかは筆者にとって課題であり、本研究では学生自身が家庭生活や家族についてよく考えを巡らせ、理解をしたうえで児童への指導にあたるための授業実践を試みることにした。

大学での集団授業において受講生同士の意見交換は、多数の思考に触れることのできる有効な手段である。しかし、家庭生活や家族に関する内容は繊細な面を持ち合わせており、私的意見を活発に交わすには慎重な準備と態度が必要である。そこで今回は、ディベートの手法を用いることにした。ディベートは、いかに説得力のある意見を出すかを競い、勝敗を決めるというゲームの要素が強く、そこに個人的意見は必要ない。また、チームが勝利するための決定的な意見を見つけ出すためや、相手チームからの質問に答えるために、さまざまな角度から物事を考えることを自ずと可能とする。

## 2. 目的

小学校学習指導要領家庭科「A 家庭生活と家族」の内容について、ディベートの手法を用いることで教員志望の学生が自身の家族について見つめ直し、考えを深めるとともに児童への指導につなげるための授業実践を行うことを目的とした。また、実践後に学生への意識調査や指導案作成、模擬授業を行うことによりディベートの効果を検討した。

ディベートは物事を多角的に考えることができるほか、私的意見は求めないため、家庭生活や家族の題材を扱うにあたり適した手法と判断したことから、本研究において用いることとした。

## 3. 方法

### 3.1 対象学生

授業実践を行うのは平成 29 年前期開講、本学「初等家庭科教育通論」の授業内で、受講生は小学校教員免許取得希望の 1 年生 10 名（うち男子 5 名）、2 年生 3 名、3 年生 2 名（うち男子 1 名）、4 年生 1

名の計 16 名である。このうち 10 名の学生は、普段の生活の中で家族についてときどき考えることがあり、残りの学生は改まって考えるようなことはないという実態があった。また、ディベートの経験を調査したところ、半数は数回の経験があるがルールを覚えていない状態であり、残りの半数はまったくやったことがないとのことであった。

### 3.2 ディベート実践

家庭生活や家族に関する 2 つの論題について、肯定側、否定側、審判の三役に分かれてディベートを実践した。この三役は、筆者が論題を提示する前に学生が任意選択し、それぞれの座席に着席することで決定した。ただし審判は 3 名とし、一つ目のディベート終了後に座席替えを行った。

肯定側・否定側の各チームは、一つの論題につき 10 分間、個人で意見をまとめたりチームのメンバーで作戦を練ったりする時間を取り、その後 20 分間のディベートを行った。ディベート後は審判役の学生が一人ずつ、根拠とともに勝利チームを発表し、票の多かったチームを勝利とした。終了後、授業時間内で考察レポートに取り組みせ提出させた。

論題を 2 つ用意したのは、前項で述べた学生の実態を鑑みて、家庭生活や家族について考える機会を少しでも多く設けたいとの理由からである。また、ディベートの進行手順や規則は厳密にせず、おおよそ同じ持ち時間で意見や質問を交互に出し合うことにした。その他、討論中の意見は相手チームではなく審判に向かって主張することや、相手チームの意見を最後まで聞くこと、個人のプライバシーに関わることや相手の人格否定につながる発言は決してしないなどのマナー面についても事前に指導することとした。

### 3.3 指導案作成および模擬授業

ディベート実践の後に別の授業コマにおいて、「A 家庭生活と家族」分野にかかわる指導案を作成させ、4 班に分かれて模擬授業を行わせた。実際には 45 分の授業であったが、時間の都合により 30 分に短縮して模擬授業を実践した。展開の一部は口頭説明にとどめるなどするよう指示した。

指導案の作成にあたっては、対象学年や実施時期、児童の実態、前後の題材などを任意で設定させた。

### 3.4 学生への意識調査

#### 3.4.1 アンケート調査

ディベートおよび指導案作成、模擬授業後に学生に対し質問紙によるアンケート調査を行い、分析した。質問紙は授業内で配布・回収したため回収率は100%であった。

#### 3.4.2 質問紙の内容

次の設問1～6に答えよ。各設問の(1)については、①強くそう思う、②そう思う、③どちらともいえない、④あまりそう思わない、⑤まったくそう思わない、のうちあてはまる項目1つを選択しなさい。

設問1 (1) ディベートを行うことで、個人的意見にとらわれず多様な考えを巡らせることができたか。(2) ④もしくは⑤を選択した場合、その理由を記述しなさい。

設問2 (1) ディベートで他者の意見を聞くことで、自分の考えが揺り動かされたり新たな考えが生まれたりしたか。(2) ④もしくは⑤を選択した場合、その理由を記述しなさい。

設問3 (1) ディベートを行うことで、自分の家庭生活・家族について考えが深まったか。(2) ④もしくは⑤を選択した場合、その理由を記述しなさい。

設問4 (1) ディベートを行うことで、家庭生活・家族について教師として子どもに伝えたいことが明確になったか。(2) ④もしくは⑤を選択した場合、その理由を記述しなさい。

設問5 (1) 家庭生活・家族に関する授業構想・指導案作成・模擬授業において、ディベートの経験は効果的であったか。(2) ④もしくは⑤を選択した場合、その理由を記述しなさい。

設問6 家庭生活・家族に関するディベートや指導案作成、模擬授業について自由に記述しなさい。

## 4. 結果と考察

### 4.1 ディベート実践

#### 4.1.1 論題1「人は結婚すべきである」

学生に肯定側・否定側・審判を選択し着席させたところで、一つめの論題、「人は結婚すべきである」を提示した。まず、10分間で着席した側の意見を

個人でまとめ、チームの仲間とのミーティングをもった。その後、20分間のディベートを行った(写真1)。

双方のチームから出された意見は、主に図1のような内容であった。肯定側からは、結婚することで人生に幸福感を味わえることや、子どもをもつ喜びを主張する意見が多くあった。これに対し、否定側からは、一人で生きていく方が気楽であることや結婚のデメリットの主張が目立った。また、好きな人ができたら結婚しなくても一緒に生活できること、子どもをもつことも可能である点を肯定側に指摘していた。この指摘について肯定側は、結婚というかたちが親や世間から一番認めてもらえると反論するなど、活発な討論となった。守るべき家族ができることで考え方やみえる社会が変わる、未来がつながっていくなどの主張が審判に評価され、結果的には肯定側の勝利となった。

授業後の考察レポートには、「私たちくらいの年齢になると結婚は憧れの一つであるが、ちゃんと話し合いをするとメリット・デメリットが出てきて結婚のイメージが変わってきた」、「結婚に夢があったが、否定側の意見を聞いて、自分の時間がなくなったりお金の問題が出てきたりして少し冷めた」、「結婚はしてもしなくてもよいと思っていたが、ディベートをしたことで、できるだけ結婚すべきと思うようになった」、「双方の意見に納得し、迷いが出た」、「私はジャッジをしたのだが、自分自身は結婚に否定派だった。しかし、『結婚』＝『幸せ』という肯定側の主張を聞いて確かにそうだと思った」などの記述があり、ディベートで多数の意見に触れたことで自身の元々の考えが揺さぶられたり、新たな考えに変わったりした様子が見受けられた。また、「事実婚など結婚のかたちは多々あり、人それぞれの考えがあるものと思った」、「結婚することで大変なこともありそうだが、得られる幸せはとても大きく大切ではないかと思った」、「結婚することが幸せに結びつかなかったのだが、自分を支えてくれる連れ合いは生きていくうえで大事なのだろうと思った」、「結婚が幸せかというと、現実とは違うと思う」などの記述もあり、ディベートを機に結婚や幸せ、生き方について考えを巡らせた姿もうかがい知ることができた。



写真1 ディベート風景

#### 4.1.2 論題2「家族を一言で表すのは血縁関係である」

論題1のディベート終了後に席替えを行い、新たな論題「家族を一言で表すのは血縁関係である」を提示した。家族にとって最も重要なのは血縁関係かどうかを問うものである。学生からは「難しい」とか「(着席した座席とは) 違う意見だから困った」などの声があがった。論題1と同様に10分間の準備後に20分間のディベートを行った。肯定側は、家族として頭に浮かぶのは血縁者ばかり、血のつながりに勝るものはない、といった意見や、科学的にも客観的にも家族と証明できる唯一の証拠となるのが血のつながりであることなどを主張した。対する否定側からは、家族にとって最も大事なものは心のつながりや絆、信頼関係であるという意見がいくつも出

された。また、肯定側の主張が正しければ、夫婦は家族とは呼べないのではないかと鋭い質問もあった。この質問に肯定側は、夫婦から生まれた血のつながった子どもが、二人を家族としてつなげていると答えた。論題1のディベートと同様、時間いっぱい活発な意見のやり取りがなされ(図2)、結果的に否定側の勝利となった。論題1では特定の学生が何度も意見を言う場面が多かったことに対して論題2においては、回数を重ね場慣れたことにより学生全員が発言することができ、ディベートを複数回実践した成果がここにもあったものと考えられる。

授業後には、「家族のかたちもさまざまで、血縁関係がなくても信頼関係で家族を築いていけるのではないと思う」、「血はつながってなくても、一緒に過ごした時間で家族になれるという意見は素敵だと思った」、「個人的には肯定側だったがディベートをするうちに、血はつながってなくてもお互い信頼できる存在であれば、ペットでも家族といえるのだと思うようになった」、「血のつながりがない人を心の底から信じて家族と思うには、時間がとても必要ではないか」、「生まれた瞬間から長い時間一緒に生きてきた血縁者は家族と呼ぶにふさわしい」など、家族とは何かを深く考察したレポートが提出された。中には、「親や親戚のいない子どもにも、家族はこれからできると希望をもってもらいたい」という思いを抱いた学生もいた。

論題1「人は結婚すべきである」	肯定側意見(二部)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幸せになれる、パートナー・子どもがいることが一番幸せ</li> <li>・結婚することが正式な形である</li> <li>・子孫繁栄、未来につながるために必要</li> <li>・結婚したから子どもをもたなくてはならないということはない</li> <li>・守るべき人がいることで成長できる、みえる社会が広がる</li> <li>・金銭的に協力できる、家事も分担できて負担が軽減する</li> <li>・親が安心する</li> <li>・世間や親からも認めてもらえる</li> <li>・地域が活性化する</li> <li>・家族愛を感じることができる</li> <li>・悩みや心配事を共有できて助け合える</li> </ul>
	否定側意見(一部)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・結婚しなくても一緒に住むことはできる</li> <li>・結婚しなくても子どもをもつことはできる</li> <li>・子どもはお金がかかるし、いなくてもよい</li> <li>・一人で暮らしていける</li> <li>・自分の好きなように生きていける、気楽</li> <li>・お金を自由に使える</li> <li>・結婚すると自分の時間が削られる、生活リズムが崩れる</li> <li>・負担が増えてイライラして喧嘩し、別れることになる</li> <li>・パートナーに先立たれたら悲しい</li> <li>・一人の人を一生愛せない</li> <li>・結婚するまでが幸せ</li> <li>・結婚にメリットがない</li> <li>・結婚しなければいけない決まりはない</li> </ul>

図1 論題1「人は結婚すべきである」の肯定側・否定側意見のまとめ

論題2「家族を一言で表すのは血縁関係である」	肯定側意見 (一部)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・科学的に家族と証明できるのは血縁関係のみ</li> <li>・血のつながりに勝るものはない</li> <li>・血のつながりには強い絆がある</li> <li>・代々受け継がれている血縁こそが大切</li> <li>・血がつながっていないければ結局は他人</li> <li>・親から血を分けてもらったからこそ大事な家族だと思える</li> <li>・夫婦をつなぐのは、二人の子どもとの血縁関係</li> <li>・自分の子どもを必死で守り育てるのは血がつながっている本能</li> </ul>
	否定側意見 (一部)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・血のつながりがなくても愛情や信頼があれば家族といえる</li> <li>・ともに過ごすことで家族となる</li> <li>・協力し支え合いながら生活するのが家族</li> <li>・血がつながっていても気持ちがつながっていないければ家族とはいえない</li> <li>・どんなかたちでも家族と思えば家族</li> <li>・心のつながりが一番</li> <li>・夫婦は家族でも血はつながっていない</li> <li>・家族＝血縁という考えは古い</li> <li>・ペットも家族</li> </ul>

図2 論題2「家族を一言で表すのは血縁関係である」の肯定側・否定側意見のまとめ

#### 4.2 学習指導案作成と模擬授業

ディベート実践後に学生から提出されたレポートには、家庭生活や家族について教師として伝えたいことや、目ざしたい授業のあり方についても記されていた。それが、「家族が愛情をもって育ててくれたからこそまで成長できたということをわかってほしい」、「家族はかけがえのないものであり、子どもたち自身もその一員であることを理解させ、家族を幸せにすることを教えたい」、「いろいろな家庭があるので、授業を受けて苦痛や悲しみを感じることなく、自分の家庭生活に前向きに生かせるような授業をしたい」、「家族にやったことを話したり、家庭で実践したくなったりするような授業をしたい」、「家族や団らんについて興味をもってもらい、積極的にコミュニケーションをとれるような授業をしたい」、「自分の家族を大切にできる子どもにしたい」などの記述である。ディベートの実践により学生自身の考えが深まるだけでなく、子どもに教育する場面まで考えが及んだのである。そこで、その考えを具体的な授業のかたちにすべく、別コマにおいて模擬授業を実践した。

学生一人ずつに家庭生活・家族分野の指導案（略案）作成に取り組ませた後に4つの班に分かれ、班としての指導案を作成させた。個人の作成した指導案を一つ採用して意見を加えたり、複数の指導案を組み合わせたり、班員で話し合いをしながら新たな

指導案を作成したりするなど、各班に工夫がみられた。ある班は、「家族を支えるスーパーマンになろう!」という、児童の興味・関心を大いに引き付ける題材名で、家庭には生活を支える大切な仕事がたくさんあり、その中には自分にもできることがあるということを気付かせる模擬授業を行った（写真2）。また別の班は、児童の成長には家族の支えがあることに気付かせ、家族への思いを手製のプレゼントとともに伝えていく授業を提案した（写真3）。各班とも本時において児童へ最も伝えたいことが明確にあり、導入とまとめを丁寧に扱っていた印象である。また、児童たちのさまざまな家庭環境を考慮した雰囲気作りや言葉遣いに努めているようであった。

模擬授業後のレポートには、「家族の分野を扱うには配慮しなければならない部分もあるため、指導案作りが難しかった」、「改善点がたくさん見つかった」、「教師によって子どもの学びの深さが変わってしまうため、経験を積みたい」など、実際に指導案を作成し模擬授業を行う難しさや反省点が多かった。そのような中でも、「ディベートを通して人それぞれ様々な考え方があると知った。そのうえでの指導案作りと模擬授業はやりがいがあった」と述べた学生もあり、指導案作成や模擬授業にディベートの経験が生かされたものと考えられる。



写真2 模擬授業風景

#### 4.3 アンケート調査から

質問紙によるアンケート調査を分析した。選択回答を求めた5つの設問の回答結果は図3の通りであり、すべての設問において「強くそう思う」と「そう思う」のポジティブな回答に集中したことがわかる。

設問6には「他の人の意見でとても揺れた」、「自分の本音と違う側の意見を見つけなければならない

のは難しかったけど、逆の立場だからわかることもたくさんあった」、「審判のときに、両方の意見を聞いて自分の気持ちが揺れ動くのを感じて楽しかった」などの記述があり、他者の意見を聞きつつ新たな意見を次々に捻出することで、家族について多角的にとらえられるようになったと考えられる。また、「新しい視点でものを考えるのに有効だと感じた」、「ディベートを通し、自分の意見を主張したり相手の意見を受け止めたりして、コミュニケーションの取り方も学べた」など、ディベートの効果を多くの学生が実感した他、「家族の存在がとても大きく、ありがたいと強く感じた」など、ディベート実践が自身の家族について改めて考え、思いを馳せるきっかけにもなったようである。

設問3（1）において「あまりそう思わない」を選択した1名は、同（2）において「考え方を考えてみたが気持ちに変化は起きなかったから」と回答していた。結果として気持ちや考えが揺るがなかったとしても、反対意見を考えた過程や経験は非常に重要であることを、今後の指導において伝えていく必要がある。

		強く そう思う	そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない
設問 1(1)	ディベートを行うことで、個人的意見にとらわれず多様な考えを巡らせることができたか。	7	9	0	0	0
設問 2(1)	ディベートで他者の意見を聞くことで、自分の考えが揺り動かされたり新たな考えが生まれたりしたか。	7	9	0	0	0
設問 3(1)	ディベートを行うことで、自分の家庭生活・家族について考えが深まったか。	8	7	0	1	0
設問 4(1)	ディベートを行うことで、家庭生活・家族について教師として子どもに伝えたいことが明確になったか。	5	10	0	1	0
設問 5(1)	家庭生活・家族に関する授業構想・指導案作成・模擬授業において、ディベートの経験は効果的であったか。	10	5	1	0	0

図3 選択式調査項目集計結果

## 家庭科学習指導案

平成29年<sup>4</sup>月13日(木)第4校時

第5学年 2組 30名

授業者

班員( 班)

1. 題材名 自分の成長に家族がどう関わっているか知ろう!

2. 本時の学習 全 7 時間中の 1 時間目

3. 本時の目標 「自分が成長した所に気づき、その成長には家族が関わっていることを知る」

## 4. 指導過程

時配	児童の学習活動	指導上の留意点	備考
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の学習内容を把握する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族にはさまざまな形があるわけで、プライバシーに気をつけて言葉遣いを意識する。</li> </ul>	
展開 35分	<p>成長は一人で出来るのかな? 考えてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・入学してから、5年生になるまで、家庭生活で自分が出来るようになったことを考える。</li> <li>・グループで考えたことを発表し合い、どうやってそれが出来るようになったのかを考える。</li> <li>・家族と自分の成長をもう一度、これからの自分の生活について考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「家庭生活」という難しい言い方で児童の反応がうかつた場合、机間指導でヒントや助言を与える。</li> <li>・自分一人で出来るように頑張るわけではない事を気づかせる。</li> <li>・自分は家族の一員として何が出来るのかを具体的に考えることが出来る雰囲気を作る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・模造紙</li> <li>・ワークシート</li> <li>・ワークシート2</li> </ul>
まとめ 5分	<p>成長は、自分一人では出来ない。家族に助けられながら成長していく</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本時のまとめについて、理解する。</li> <li>・次時の予告を聞く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族への感謝の気持ちに気づかせる。</li> <li>・次回から物づくりに入ることを伝える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・模造紙</li> </ul>

写真3 学生が作成した指導案

## 5. おわりに

本研究により、学生の家庭生活や家族についての思考は深まったものと考えられる。また、作成された指導案や模擬授業からは、ディベートを経験したことで得た、教師として児童へ伝えたい事項が明確にうかがえ、指導力の面でも一定の成果があったと結論づけられた。ある学生からは、「家庭科は家族とのつながりを強く意識していて、自分の成長を振り返ったり、家族のかたちや役割、大切さに気付いたりすることができる。児童の心に寄り添える教科であると思う」との深く考察されたレポートが提出された。

ただし、家庭生活・家族の学習は広範にわたり、本研究の内容のみで知識や指導技術がすべて得られたわけではない。なお一層充実した教員養成が行えるよう、今後も検討を続けたい。

## 6. 倫理的配慮

個人情報の取扱いには十分配慮し、個人が特定されないよう写真の一部を加工した。また、写真やアンケートは研究目的のみに使用することの承諾を得ている。

## 文献

- 1) 文部科学省. 小学校学習指導要領解説・家庭編. 東洋館出版社. 2008
- 2) 濱崎タマエ. 小学校家庭科における「家族」教育実践に関する研究. 臨床教科教育学会誌. 2014;14(1): 43-51
- 3) 菊地真理. 家族の多様化と小学校における家庭科教育. 白鳳女子短期大学研究紀要. 2009 ; 4 : 99-104
- 4) 加地芳子, 大塚真理子 (編著). 初等家庭科教育法—新しい家庭科の授業をつくる—. ミネルヴァ書房. 2011



## Abstract

### Deepening Consciousness and Furthering Teaching Ability by Debating About the Family

Ayaka BABA

Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

The ministry's curriculum guideline for home economics in elementary school includes materials regarding teaching about the family and family life. This study is a report of lesson practice which is intended to develop students' thinking about the family and family life using debate. Debate permits us to think from various perspectives, without the need of a personal opinion, which makes it a suitable method for thinking about the family. Students aspiring to become elementary school teachers had in-class debates about two themes relevant to the family and determined whether the affirmative team or negative team won. Making affirmative or negative remarks, students discovered new ideas about the family and family life. In addition, they acquired information to teach elementary school students about the family, so they tried creating a teaching plan and teaching trial lessons on the family in four groups. Those lessons were the results of their experiences and ideas coming from the debates.

**Keywords:** teacher training course, home economics in elementary school, family, debate

